



## Veritas No.30(2005.11.4)創立130周年記念号

### 目次 (敬称略)

<学院創立130周年に寄せて>

浜下 昌宏 (図書館長)

<「ベアテの贈りもの」上映に寄せて>

平井 雅子

木下 貴美子

<研究室から>

寺嶋 正明

<彫刻《像を彫る》の修復について>

水野 敬子

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (3) >

松村 昌家

<図書館からのお知らせ>

無断転載を禁ず

## <学院創立 130 周年に寄せて>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

130 年という数字は 4 世代ほどを意味しているだろう。我々の曾祖父や曾祖母がすでに他界しているように、本学草創期の先達のご意見はもはや聞くことができない。創設者の高い志には及ばないとしても、はたして我々は今日、タルカット、ダッドレーお二人の魂を幾分かでも継承しているのだろうか。かつて朱子は、孟子没後は儒者たちの品格が劣ったと嘆いて、「高踏的な者は虚無寂滅の外道に流れ、卑近な者は雑駁で見栄えだけのところに墮落した」と書いた（『朱文公文集』）。むろん、非力ではあっても、塵のような営みを 130 年も積み重ねれば自然と結実があるにちがいない。その積み重ねを十分にしてきたのだろうか。図書館・史料室を預かる者として齒がゆく思う。先日台湾のある大学を訪問したが、創設数年という若い大学であったが、新築中の図書館には 22 万冊の本が入るといふ。すでに本学図書館の蔵書数の半分ほどである。また、近隣の D 大学、東京の A 大学、N 女子大学、等々のキャンパスを訪問した経験のある者は、そこに大学資料館ないし資料展示室があるのを見たであろう。そうした建物も部屋も、残念ながら本学にはまだない。わずかに JD 館の入り口に展示コーナーがあるだけである。130 年の歴史を持ちながらなぜだろう、と思う。財政的理由、学内のスペースの限界ゆえだったかもしれない。が、要するに本学にその意志がなかっただけのことにすぎない。——では、本学の誇りはどこにあるのか。いうまでもなく、多くのすぐれた同窓生によって本学の声価は高められてきた。私の経験でも、数年前ロス・アンジェルスで、アメリカ人のある方に紹介されると、その方はなぜか本学の名前を知っているという。かの地のあるミュージアムの館長は本学のご出身だからだといふ。また UCLA でのある会合で、私の隣席の Japan Foundation（国際交流基金）の現地在住スタッフは、やはり、私の名刺を見て本学の名前を知っているという。なぜならアメリカの西海岸地区で最もすぐれた日本語教育の指導者の方が本学の卒業生というからだ。Kobe “National” University（神戸大学）と Kobe College との違いを説明しなくてすむことの安堵感も本学出身のそのような人材がおられるおかげである。むろん海外のみならず、国内においても卒業生の貢献に出会う。たとえば先年津和野を訪れた際、お目にかかった彼の地の地方史家は本学の名前をご存知という。その方は現役では津和野高校、益田高校などの校長を歴任された方であったが、あるとき教え子の女子生徒の一人が自分には憧れの先生がいるという。それは英語科に赴任したばかりの女性教師で、その方が会いに行くとなるほど件の女子生徒が自分の理想とするに足る知性と品位を持った女性であったが、出身が本学であったのでよく覚えている、という話であった。——130 年という区切りによって我々は学院創設者の志をなぞって新設校を作り上げていくような気持になれないものか。次の 130 年に続く同窓生を育てること、そのためにこそ、図書館をいっそう充実させ、常設展示のできる史資料室の開設を目指したいと思う。

## <「ベアテの贈りもの」上映に寄せて>

平井 雅子 英文学科教授

神戸女学院創立130周年記念行事として、11月10日木曜日、「ベアテの贈りもの」という映画の上映会をします。場所は講堂で、午後5時半から、院長の挨拶と、元文部大臣である赤松良子さんの講演が約30分間あります。その後、90分間の映画上映があります。みなさん憲法24条をご存知でしょうか。憲法24条は男女の平等を明示する条文で、ベアテさんは日本の女性の幸せを心から願い、敗戦後の日本の憲法草案の作成に携わりました。このとき、ベアテさんは22歳でした。みなさんと同年齢の女性が、一つの国の憲法を作った、しかも当時の世界で最も進んだ理想を明文化したという事実は、今の私たちに大きな自信を与えてくれるものだと思います。

赤松良子さんは、いま社会で活躍している多くの女性たちに呼びかけて、この映画を作った委員会の代表です。委員会の女性たちは、日本のすべての女性にとって大切な憲法24条、その草案を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんの話を多くの人に知らせたい、と思いました。ベアテさんは、ロシアから日本に亡命したユダヤ人ピアニストの娘で、5歳から15歳まで日本で育ち、日本社会と女性の状況を見聞きし、アメリカの大学に留学中に第二次世界大戦が始まって両親と別れ別れになりました。そんな彼女が歴史の中で体験した苦労や、差別や抑圧に苦しむ人々への共感が、戦後すぐ日本に戻り憲法草案作成に関わった彼女を、つき動かすエネルギーになったと想像されます。そして赤松代表たちは、その後の日本の女性たちが、個人としての自由と平等、男女の協力に基づく結婚、社会活動と貢献、というベアテさんが憲法にこめた願いとその精神を受け取り、どのようにそれを具体化していったか、どのように日本社会と女性の生き方を変え、法、教育、職場を整備していったか、という足跡を記録し映画にしたい。それを、これからの女性たちに見て欲しい、と思ったのです。赤松代表自身は、国際的な女性差別撤廃条約の批准に貢献し、国内で男女雇用機会均等法を成立させた方として有名ですが、この法律は就職・昇進・定年など職場における男女の平等を謳った日本初の法律です。今の社会では当然と思われる男女の雇用、昇進の機会や労働条件の平等も、つい最近までは考えられなかったし、今でもこれからも一歩ずつ、努力し挑戦する女性たちがあってこそ実現していくのです。過去の女性たちのたいへんな努力のお陰でこんなことが出来る、そう気づくと、その贈り物を大切に自分の手でもっと活かさなければと思います。

赤松良子さんから、初めてこの映画の話をうかがったとき、私は是非、神戸女学院で上映の機会を作りたいと思いました。すぐに何人かの教員、学生が呼びかけに答え、それが膨らみ、俗称「ベアテの会」と呼ばれる学生たちの広報活動、映画上映に先駆けた勉強会

や企画などが開かれています。みなさん、この上映会に来て、今の私たちにできることを一緒に考えませんか？

木下 貴美子 総合文化学科3年生

女性は男性と同様の権利を持ち、性別によって差別してはいけない。現代では、当たり前のことです。しかし、この当たり前のことが、昔はそうではありませんでした。では、なぜ、現代では、普通のことだと思えるのでしょうか。私たちは、2005年11月10日に神戸女学院で、創立130周年記念式典として『ベアテの贈りもの』というドキュメンタリー映画を上映するというを先生方からうかがいました。そして、ベアテ・シロタ・ゴードンというアメリカ人女性の存在を知りました。

ベアテ・シロタ・ゴードン。彼女は、22歳の若さで、日本国憲法の草案作りにたずさわります。憲法14条・24条。彼女が作った条文です。男女の平等を明示するこの条文は、当時、日本だけではなく世界的にも先進的な条文でした。彼女の母国であるアメリカにも、このような条文はありませんでした。しかし、日本で育ち、日本のことをよく知るベアテは、日本人女性のためにどうしても男女平等を謳う条文を作る必要があると考え、それを成し遂げたのです。しかし、14条24条が成立した後も、女性に対する偏見は根強くありました。男女平等を謳う条文が成立したからといって、そのことによって、突然、男女平等な社会が実現したわけではないのです。そこには、男女平等を現実としようとする努力を重ねた日本の女性たちの存在がありました。映画『ベアテの贈りもの』は、ベアテだけではなく、そのような日本人女性たちの活躍も取り上げています。また、「ベアテの贈りもの上映会」では、女性の地位向上に尽力した（そして、現在も尽力しておられる）日本女性の一人である、赤松良子氏をお迎えし講演をしていただきます。赤松良子元文部大臣は、男女雇用機会均等法を成立させた方であり、本学にも1年間在籍されていたことのある、わたしたちの大先輩です。赤松氏の講演も、映画とともに楽しみください。

「ベアテの贈りもの上映会」の準備を通じて、わたしたちは、当たり前だと思っているさまざまな事柄が先輩女性たちの努力の成果であることを知りました。『ベアテの贈りもの』上映会により、ひとりでも多くの方が先輩女性らの努力を知ってくださることを、そして、また、現代でも続いている女性への差別を、なくしていくのだ、という活力がすこしでも大きくなることを、願っています。

『ベアテの贈りもの』上映会

- <日時> 2005年11月10日(木) 午後5時30分～7時30分  
<場所> 講堂  
<プログラム> ①院長挨拶および赤松良子・元文部大臣講演(約30分)  
②映画上映(約90分)

\*学内の方へ

- <チケット> 参加費は無料ですが、事前に整理券を入手してください。  
整理券の入手は下記連絡先かメールにご連絡ください。  
<連絡先> 石川研究室(JD - 312)  
<Mail> kc\_beategift@yahoo.co.jp(学内専用)  
<HP> [http://www.geocities.jp/kc\\_beate](http://www.geocities.jp/kc_beate)

\*学外の方へ

- <問い合わせ先> 神戸女学院大学総務一課までご連絡ください。  
主催：学院創立130周年記念式典実行委員会

☆☆☆ベアテ・シロタ・ゴードンさんの自伝、『1945年のクリスマス 日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝』(920.7/GO1)を、創立130周年記念行事関連指定図書にしています。閲覧ご希望の方は新館閲覧カウンターにお申し出下さい。

## <研究室から>

寺嶋 正明 環境・バイオサイエンス学科教授

私にはゼミの学生に言い聞かせている3つのフレーズがある。3年生でゼミをスタートするときには、まず「私は卒論発表前の1~2ヶ月間、君たちと実験データを見ながらディスカッションをするために今から君たちを教育します。」と宣言する。女学院に限らず、4年生というのは実験的研究をすることについてはズブの素人である。実験データを前にして、「ああだ、こうだ」とお互いの意見を言い合うためにはそれなりのトレーニングがいる。「あしたのためのその1」、「あしたのためのその2」といったスポコン路線にはまり、バスケットに夢中の10代をすごした私は「トレーニング」をして「何かを達成する」ことが当たり前のようにしみついでしまっている。幸いに女学院では3年生からゼミに所属するため、じっくりとその準備に取り組むことができる。3年生でテキストを使って勉強させ、就職活動が始まるとその合間を縫って学生を集め、少しずつ実験のやり方をトレーニングしている。

次に「私には何を聞いても結構です。」と公言している。自分の4年生の頃を考えると、実験しながら考えたことの大半はハズレだった。いろいろ考えた末に当時の指導教員に「こうこうと思いますが…」といっても、即座に「違う。それはこうこうで…」と教えをいただくことになった。たまに、「アタリ」の意見を言えたときは非常にうれしかった思い出がある。女学院の学生さんは「思わぬ方向」から「ドキリ」とする意見を言うことがたまにある。また、ものわかりよく「わかりました。」と学生さんにいわれてしまうとこちらの思考もそこでとまってしまうことに最近気がついた。「先生、わかりません。どういうことですか?」と質問されて、違った説明の仕方を考えているうちに、自分自身で今まで気がついていなかったことや新しいアイデアを思いついたりすることが多くなった。で、ハズレでもなんでもいいから、とにかく意見や質問をどんどん言ってもらうことにしている。

最後に、「研究のレベルは下げるつもりはないから、勉強するのはそちらですよ。」ということにしている。学生のレベルに合わせたことをやるのは簡単なことだが、自分のレベルが学生並になる危険性がある。綱引きをやるごとく、できるだけ、学生のレベルをこちら側に引き上げるよう格闘している。女学院ではもちろん学部卒業後、専門家の道を進むものは数が限られている。世界的にみても理系の専門教育は大学院に移行しているが、人間環境科学専攻で優秀な学生は他大学を含めて大学院教育を受けるのに必要な実力は身につけているし、その実績も多数ある。また、卒業研究で身につけた「目標に向かって準備をし、協力して仕事をすすめ、仕事の出来を適宜、自分でできるだけ客観的に評価し、仕事の内容を修正する。」という能力は実社会のどの分野でも大いに役立つと信じている。

かくして、卒業論文発表まで数ヶ月になった今、4年生は毎日10時に集合して、簡単な打ち合わせを私と済ました後、熱心の実験に取り組んでいる。「このデータ、やばくない?」、「この実験、もう一度かな?」などなど、1年半のトレーニングの成果を十二分に発揮してくれ、信頼のおける実験データを生み出してくれる。そして、「実験データを前に一緒にディスカッションをする」という私の夢をかなえてくれている。私としてはこのチームであと1年は実験を続けたい気が大いにあるのだが、卒業を認めないわけにもいかず、高校野球の監督のように3回生を相手に新チームのトレーニングにいそしんでいる。

## <彫刻《像を彫る》の修復について>

水野 敬子 図書館課長

図書館本館西側壁面に設置されている、齋藤素巖の彫刻《像を彫る》の修復が、今年の夏（2005年8月）に行われました。石膏の上にブロンズ風に彩色された作品で、作られてから80年ほど経っています。以前からヒビ・剥落などもあり、いずれはブロンズ化して保存しなければならないと言われていました。しかし、今回の調査により石膏は良好な状態を保っている事がわかり、オリジナルの石膏のまま永く残すよう修復が施されました。



作者齋藤素巖は、彫刻を主体とした美術団体「構造社」の設立者の一人です。「構造社」は大正15年(1926年)に結成され、昭和初期にユニークな活動をしていたことが知られています。《像を彫る》は大正14年(1925年)にはすでに製作され第6回帝展に出される予定でしたが、齋藤が帝展を批判して出品を取りやめ、昭和2年(1927年)になって第1回構造社展に出品されたという作品です。神戸女学院が神戸山本通りから岡田山キャンパスへ移転する際、「昭和7年に作者自ら来院、設置の場所を選定して、寄贈した」と学院の資料『新築記念帖』に記録されています。「構造社」がめざしたものとして、一つには彫刻と建築の融合が挙げられており、《像を彫る》は「構造社」の理念を体現した齋藤素巖の代表作と言えます。

この度の修復のきっかけは、現在全国を巡回している「構造社展 昭和初期の鬼才たち」という展覧会を企画された、宇都宮美術館の学芸員濱崎礼二氏から神戸女学院へ《像を彫る》の出品依頼があったことです。結局、作品保護の観点から展示は見合わされましたが、学院はこの機会に修復を行う事を決定し、修復家として展覧会にも携わられ「構造社」の彫刻についての第一人者である高橋裕二氏(有限会社ブロンズスタジオ)に修復を依頼しました。

修復により当初の美しさを取り戻した作品を、あらためて鑑賞していただく機会として、図書館では講演会を企画しました。たくさんの皆様のご来場をお待ちしております。



神戸女学院図書館蔵「像を彫る」

神戸女学院創立130周年 神戸女学院大学図書館主催特別講演会

『齋藤素巖「像を彫る」修復について』

- <講師> 濱崎礼二氏(宇都宮美術館学芸員)
- <日時> 2005年11月25日(金) 午後2時より 開場 午後1時
- <場所> 神戸女学院図書館本館閲覧室

展示「創立130周年を覚えて—神戸女学院が受け継いできたもの—」開催中です  
また、当日は学院資料の特別展示も行います  
講演終了後、KCCルームでの懇話会にご案内いたします

<問い合わせ先> 神戸女学院大学図書館  
〒662-8505 西宮市岡田山4-1  
TEL : 0798-51-8565 FAX : 0798-51-8567

☆☆☆『構造社展 昭和初期彫刻の鬼才たち』(708.5/UT1)と、齋藤素巖の作品集『齋藤素巖』(735.5/SA1)の2冊を、大学図書館主催特別講演会関連指定図書にしています。閲覧ご希望の方は本館閲覧カウンターにお申し出下さい。

## ＜ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション（3）＞

### ディズレイリの「処女演説」その1＞

松村 昌家 大手前大学大学院教授

1837年12月7日に開かれたイギリスの国会は、急進派から保守党に鞍替えして当選を果たしたサー・フランシス・バーデット（慈善活動家として有名なアンジェラ・バーデット＝クーツの父親）の変節をめぐって荒れ模様となっていた。この問題を最初に持ち出したのは、アイルランド出身のスミス・オブライエン議員であったが、当時急進派の一員として議席を占めていたブルワー・リットンが、そのあとを受けて、痛烈にバーデットをこきおろした。

サー・フランシス・バーデットも負けてはいなかった。激しく交戦するなかで彼は、最も忌まわしき政敵はダニエル・オコンネルと見て、彼に対して反撃の矛先を向けた。自由党から離脱したことと比べれば、「カトリック教の司祭集団と組んで、アイルランドの有権者たちを投票所まで無理やりに引っぱって行き、彼らの神（オコンネル）に票をいれさせたほうがよほど罪が重いのではないか。」

ダニエル・オコンネル（1775－1847）は、アイルランドの民権運動家として有名だ。当時は、ダブリン選出の議員として活躍中であった。1823年にアイルランド協会を組織し、それを基盤にして国会議員に選出されたことがあり、のち（1841年）には、カトリックとして最初のダブリン市長になる人物である。

バーデットの攻撃に対するオコンネルの応戦にも熱がこもった。なかでも注目すべきは、彼がアイルランドの民族運動を推進するのに、「金銭の支給」を受けていることを、大っぴらに認めていることだ。「私はアイルランドで最も多額の収入を得ることのできる職業（法廷弁護士）を犠牲にして」政治活動に励んでいるのだ、それに対して応分の支給を受けるのが、何が悪いのか、というわけである。

オコンネルの弁論が終わって席についたところで、ベンジャミン・ディズレイリが立ち上がった。

ディズレイリとオコンネルが不倶戴天の仇敵の間柄であったことは、少なくとも当時の政界には知れわたっていた。彼らの敵対関係は1835年以降のもので、直接のきっかけは、ディズレイリがサマセット州、トートンでの立候補演説のなかで、オコンネルを「扇動者で裏切者」呼ばわりしたことだったといわれるが、話は決して単純ではなさそうだ。ディ

ズレイリは命をかけた決闘によって、決着をつけようとしたことさえあったのである。

この日の国会における保守党のプログラムでは、オコンネルのあとは、スタンリー卿（第14代ダービ伯爵）の出番になっていた。ところが、ディズレイリが彼に歩み寄って、ぜひ自分に出させてほしいと申し出て、それが承認された。そしてディズレイリの処女演説がはじまったのである。

ディズレイリとオコンネルとの敵対関係を考えればどんな異常事態が起こっても不思議ではなかったかもしれないが、国会におけるこの突発的現象は、容易に理解し難い。彼をこのような行動に駆り立てたのは、いったい何だったのか。前回に紹介したトマス・パワー・オコーナー（Tay Pay）の『ビーコンズフィールド伯ベンジャミン・ディズレイリ伝』第1章に収録されている「処女演説」は、このような事情を探る上で、他にない手がかりを与えてくれるように思えるのである。

「濃緑色のフロックコートに白色のベスト、大きな飾り模様のついたパンタロン」といった風変わりなダンディ・スタイルで、さっそうと立ち上がったディズレイリは、国会での初舞台を踏む者に、全議員の「寛大な思召しを」賜るように、と挨拶して、「ヒア、ヒア！」の声援を受けた。しかし、そのあとにつづく本論の冒頭部分はおそらく議員たちの期待に反するものであった。

名誉ある学識豊かなダブリン選出の議員（オコンネル）は、冗漫で、ばらばらでひよろひよろで、さ迷うが如き、混ぜこぜの演説をもって、ノース・ウィルツ選出議員の名誉ある準男爵（サー・フランシス・バーデット）を嘲弄された。

ここでは、先ほどの「ヒア、ヒア」に代わって、笑いがわき起こった。それは彼の演説口調が誘い出した笑いというよりは、むしろ国会に初登場を叶えたディズレイリの、オコンネルに対する対決の構えそのものが、引き起こした笑いだったのではないか。1835年に、ディズレイリは、度重なるオコンネルへの怨みを、きっと国会において晴らしてみせてやると、彼あてに手紙を書いたことがあった。

スミス・オブライエンとオコンネルの二人から、サー・フランシス・バーデットに浴びせられた「変節」の非難・攻撃は、ディズレイリにとって他人事ではなかったのである。

ディズレイリは1832年に「徹底した急進派」（high Radical）を標榜して、バッキンガムシャー州のハイ・ウイカムから出馬したことがあった。しかもそのときには、オコンネルから推薦状を書いてもらうという経緯さえあったのである。しかし選挙戦では敗退、

以後2回落選をくり返すことになる。そして1837年7月、4回目にメイドストーンから擁立されて立候補して当選したときには、「最も有望な青年保守党员」と目されるようになっていた。オコンネルから見れば、ディズレイリはまさに急進派から保守党への「変節者」であったのであり、ディズレイリからすれば、オコンネルは個人的にも政治的にも最も威圧的な、そして最もうとましい仇敵だったのである。メイドストーンで初当選を果たしたディズレイリは2年前の予告を実現させるためにも、この日のくるのを待っていたのであろう。(つづく)

### <図書館からのお知らせ>

#### ●図書館新館に新しい掲示板を作りました

図書館新館に入館すると、右手にB1F自由閲覧室へと続く階段があります。その踊り場に、夏期休暇中に、新しい掲示板を設置しました。図書館からのお知らせ・お願い・ご案内のほか、他機関での催しなど、みなさまへの幅広い情報提供の場として活用していきたいと考えています。

入退館の折に、ちょっと踊り場の方をご覧ください。

### <史料室からのお知らせ>

#### ●神戸女学院創立130周年記念展示開催中

大学ジュリア・ダッドレー記念館2階展示スペースにて「神戸女学院130年のあゆみ 初期神戸女学院を支えた人々」展を行なっています。今回は神戸女学院創立時から初期の学校に協力してくれた日本人（三田藩の人々、卒業生教員、日本人教師たち）を紹介しています。展示目録（年表つき）を置いてありますので、ご自由にお取りください。

#### ●『学院史料』第20号発行

神戸女学院史料室の機関誌『学院史料』の最新号（2005年10月発行第20号）ができました。創立130周年を記念して創立者タルカット先生についての史料の紹介があります。図書館本館1階の史料室前に置いてありますので、ご自由にお取りください。